
春ノ桜

まなつか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

春ノ桜

【Nコード】

N2436S

【作者名】

まなつか

【あらすじ】

春、それは出会いの季節。同時に別れの季節でもある。

学生にとっては一生の別れでもあるし、一生に一度の出会いかも知れない。そんな春を題材にした一話完結の短編集。青春ストーリー満載！

送り出す、彼らの青春、見届けて。

私は教員をやってまだ4年だ。私なりに一生懸命がんばってやってきた。

そして今日は初めて受け持った三年生のクラスの卒業式である。

「みんな、それじゃあ廊下に並んで」

みんな静かに廊下に並んだ。緊張した空気の廊下。私もいつそう気を引き締めて体育館へと向かった。

卒業式は好きではない。

私から言わせればこんなお堅い式など彼らは全く望んでいないはずだ。

もっと笑って、泣いて、喜び、そして別れに悲しむ。そんな卒業式があればいいなあとはいつも思うのだ。いつか校長になれたならやってみてもいいかもしれない。

私は自分の受け持ったクラスの生徒の名前を呼んでいった。皆、元気よく返事をして卒業証書を受け取っていった。

私の仕事はもうこれで終わりだ。

なんとかかんたらとかいう理事長だのなんだののお偉いさんの話をばーっと聞きつつ私は考えていた。もう少しこのクラスにいいことをしてあげたんじゃないだろうか、と。

卒業式が終わって私は学校の校舎の周りを散策していた。

「あれ……？」

誰かの話し声が聞こえる。もうみんなはとくにグラウンドの方へ行っているはずだが。

私はついつい聞き耳を立ててしまった。

「せ、先輩。私、ずっと先輩のことが好きでした!」

あらあら。告白の現場でしたか。

私は悪いとは思いつつもそーっと木の陰に隠れて見守ることにした。

なんと、告白されているのはうちのクラスの角田君じゃないか。

いつもあまり目立たない子だったけど、親切だった。ちゃんと見る人は見てるのね。

風が吹いて桜の花びらが舞い散った。今年は結構早く咲いたなあ。

「あ、のさ……。葉山さん」

おっ、いけいけ。彼は恥ずかしそうに頭をかきながら舞い散る桜をみていた。

「あ……」

「えっ?」

一瞬目があった。私はしまったと後悔した。しかし彼はすぐに目を逸らした。そして――

「僕も……。好きなんだよ」

「ほ、本当ですか?」

ありがちでべたべたな展開だったけど私は結構好きだった。青春って感じがたまらない。

「あ、あの……。先輩の第二ボタンを下さい」

「あー。それは……。えっと」

角田君が私にちらちらと視線を寄越してくる。うちの県では受験の前に卒業式をやることになっている。そのためボタンをあげてしまふと受験の時に減点されてしまうのだ。私は何度もあげないようにと事前に注意を出していた。

しかし、私は落とし物箱の中にボタンがいくつか入っていることを知っていたので微笑んでうなずいてあげた。

「いいよ、あげる」

「ありがとうございます!」

彼女はうれしそうに目を輝かせて小さなはさみを取りだし、角田君のボタンを取った。

そして、流れる静かな時間。

時折吹く風で桜の木がサワサワと揺れ、そのたびに花びらが舞い散る。

「最後に、僕からもいいかな？」

先に口を切ったのは角田君だった。

「はい、なんでしょう？」

「抱きしめても……いいかな？」

いきなり大胆だなこの野郎。まあ、流石に私がみている前でキスなんてしないか。つか私がいなくなればいいんじゃないか。

そう思うも目が離せなかった。

「……いいですよ」

彼女は恥ずかしそうにうなずくと彼の方にそつと寄っていった。

「好きだよ、葉山さん」

「私もです、先輩」

私は正直に暖かそうだな、と思った。今日はいい天気だ。黒っぽい制服は暖かいだろう。

「あのさ、連絡先交換しない？」

「あ、はい」

彼らはお互いの生徒手帳に連絡先を書いた。

「ありがとうございます、先輩」

「いやいや、こっちもね」

「それでは、また……」

「うん、またね」

彼らは名残惜しそうに別れた。葉山さんは教室へと向かっていった。角田君は私の方へ駆けてくる。

「先生……えへ、えへへ」

「何よ、あなたやるわね」

「いや、その、ええ……まあ」

彼はとてもうれしそうに笑って近くの桜の木を見上げた。

「綺麗ですね。でも、なんか寂しく思えます」

「そうねえ、確かに別れの時期に咲くもんね。でも、出会いの季節に咲く花でもあるじゃない？」

「まあ、そうですね。先生、どこからみていたんですか？」

「あははは、丁度目があったときぐらいかな」

「ははは、そうですね」

「あ、そうそう。ボタン渡さないかね」

私は彼にそこで待っていてと言って職員室に向かい、ボタンを一つ握って戻ってきた。

彼は石垣にもたれかかって空をみていた。私に気づくとゆっくりと身体を起こして手を差し出した。私はその手にボタンを乗せる。

「ちゃんと受験までにつけときなさい」

「はい、ありがとうございます」

「それじゃ、みんなのところに行きなさい。待ってるわよ」

「はは、そうですね。それでは先生、ありがとうございます。がんばって合格しますね」

「うん、がんばって！」

私は彼が駆けていくのをぼんやりとみていた。

私も彼みたいな輝かしい青春を送りたかったなあ。

だけど、もう昔に戻ることは出来ないんだ。だから今青春を送ろうとしている人たちに素晴らしい思い出を残してあげようと私は思い、教師になったのだ。

ちゃんと出来てるかな、私は――

送り出す、彼らの青春、見届けて。（後書き）

こんにちは、まなつかです。

もう受験生だって言うのに相変わらずのんびりしています。仕方がありませんね。

今回からは春にちなんでの青春もの（明るいもの）を書きたいと思います。

で・き・れ・ば 鬱展開にいたくないのががんばります。

感想などをいただけるとうれしいです。

それでは。

初めての、若い女の、先生が――

僕は今年から高校生になる。

受験は何とか切り抜けてギリギリで入ったそこそのレベルの学校だ。

僕は今講堂内で入学式の真っ最中だ。

「えーそれでは……」

つるつばげの校長の話をまじめに聞いている奴は半分くらいだろうか。僕はとつくに聞くのをやめて講堂の中を眺めていた。

中学の頃はぼろつちい校舎だった。なんでも築60年らしい。それに比べてこの学校は一昨年出来たばかりの新しい学校だ。僕はそれにあこがれてここを目指したわけだ。

入学式はあつという間に終わって教室に戻ることになる。

僕は自分の席について担任の登場を待った。まだ担任はわからない。みんなはどんな先生か話し合っていた。

「なあ、どんな先生がいい？」

前の席の奴が振り向いて訊いてきた。

「うーん、なんか優しそうな先生かな？」

「女か？」

「どっちでも。あ、出来れば男がいい」

「お前……夢がないなあ」

教師で女はもう嫌だった。中学校……いや、小学校からずっと女教師だったのだ。しかも大抵が年を食ったおばさんだった。

そんなざわめいた教室を戸を引く音が静かにさせた。

「みんな、おはようございます」

女教師だった。しかも若いの。みんなが一斉に返事を返す。――主に男子だが。

「私はこのクラスの担任の桜井空といいます。そら先生って呼んでね」

「そら先生！」

いきなり前の奴がそう叫んだ。

「はい、何？ えーと、君は……」

「桂木です」

「あ、はい。桂木君」

「独身ですか？」

いきなりそれかよ。

「えっ……えーと……」

ほら、先生困ってるじゃんか。

「桂木、少しは黙れ」

「何だよ！？ いいじゃねえかよ！」

「いいから。あ、先生。続けて下さい」

「あ、はい！ ありがと……」

先生が僕の方を向いて少し微笑んだ。その笑顔に少しだけドキッとした。よく見ると結構美人だな。

そんな感じで自己紹介が進んでいった。

そら先生……か。

初めてあったけど、何かわからないこの感情。何だろう。

放課後、僕はそら先生に呼び出された。

「あのね、私付き合っている人がいるの」

何でいきなりそんなことを。

「学生なんだけど……」

「ぶっ……！」

思わず吹いてしまった。

が、学生って……ええ！？

僕の恋は早くも終わりを告げたようだ。
そのあと、話したことは恋愛相談だった。

初めての、若い女の、先生が——（後書き）

こんにちは、まなつかです。

いや、結構更新サボっていましたが、いろいろあったんで。

なんか振り返るといつも恋愛物書いて文学的作品書いていない
じゃんということ夏ノ風を——とちょびつとずつ書いています。
それでは。

先に行く、彼女の背中を、追いかけて

「ねえ！ 今度花見に行こうよ！」

私の一番の友人である友紀子が一つに縛った髪をぷらぷらさせながらそう言った。私は読んでいた本から顔を上げた。

「いきなりだね。いつにする？」

私も桜が綺麗だなと思っていたので公園にでも出かけようかと思っていたのだ。

「今日！」

「今日……か」

今日はいい天気で、気温も高く、お花見日和と言ったところだ。最適かもしれない。

「いいよ」

「やった！」

彼女は大げさに跳ねて喜んだ。中学三年生にもなって子供っぽいなと思った。

だけど、彼女が私のことを誘って欲ってくれたんだ。私は4月から転校する。ここから遠く離れた青森に。クラスでは多く友達ができず、いつも一人で読書をしていた。そのため、あまり思い出がないのだ。

だから私はそんな彼女の想いを素直に受け入れた。

私たちは自転車を押しながらいつも通る道とは別の道を歩いていた。午後の日差しが気持ちよい。

「ねえねえ、コンビニ寄ろうよ！」

「あ、ジュースとか？」

「そうそう！」

私たちはセブンイレブンに寄ってジュースを買った。私はなっちゃん。友紀子はファнтаだ。

そして近くの桜で有名な公園へと向かう。自転車にまたがる。そして風を切って走り出した。

「もうすっかり春だねー」

「うん、暑いくらいだよ」

私たちは駐輪場に自転車を止め、飲み物を持って公園に入った。

「うわぁ……」

私たちはその光景にしばし見とれてしまった。

ピンク色の桜が見事、満開を迎えていた。花見をしている人も数多く、どこからかバーベキューのいいにおいがした。

「行こう！」

友紀子は私の手を取った。

「えっ」

私は彼女に遅れまいとついて行く。

目の前に行く彼女の背中はどこか寂しそうだった。

先に行く、彼女の背中を、追いかけて（後書き）

こんにちは、まなつかです。

本当はもっと続けていきたかったのですが、流石に時が流れても
う5月ですのでこの話にて連載は終了とさせていただきます。
ご愛読、ありがとうございました。

これからは夏に向けての小説を書いていきたいと思っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2436s/>

春ノ桜

2011年4月25日06時10分発行